

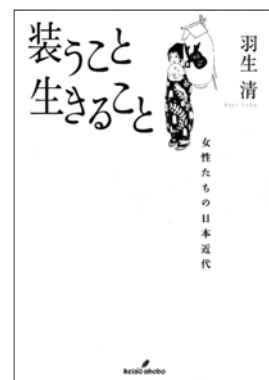
<書評>

羽生 清 著

『装うこと生きること——女性たちの日本近代』

(勁草書房 2004年 229頁 ISBN 4-326-85184-8 2,500円)

小山 直子



『ジェンダー研究』の書評の対象として本書が取り上げられた理由は、あえて誤解を受けることを恐れずに言えば、そのタイトル「装うこと生きること」にあったのではないだろうか。そして、そうであるなら、我々はジェンダー的思考が「生きること」と同時に「装うこと」にも注目し始めたことを再確認させられることになる。

本書における「装うこと」と「生きること」はどのような意図をもってこのように併記されたのだろうか。日本近代の女性たちの「装うこと」と「生きること」をそれぞれ独立した形で語ろうとするためだろうか。それとも、二つを相関させながら語ろうとするためだろうか。その場合、「生きること」を明らかにするために「装うこと」を検証するのか。「装うこと」を明らかにするために「生きること」を検証するのか。それとも、二つを相関させて日本近代の女性を語ることの必然性を実証しようとしているのか。

著者は書名の由来を語っていない。しかし、服飾表現の詳細な考察が行われており、それらを分析のツールとして機能させることで、日本近代の女性たちの「生きること」を再構築しようという意図は明白である。本書は、津田梅子、樋口一葉、与謝野晶子、平塚らいてう、林芙美子らを主軸にすえて、日本近代の女性たちの「生きること」を捉え直そうとした研究書なのである。

そして、著者自身も「国と家からの解放を試みた女たちの近代を風俗の間から読んでみたい。言説を裏切って服装が語る真実があるかもしれない」と述べ、「言葉で組み立てる思考とは違う装いの試行錯誤。扮装や偽装も、自由や解脱に向かうに道筋の一つではないか」と述べている。その問題提起は面白い。

ただし、言葉によって「描写された服飾」から、物としての服飾を考証するだけでなく、そこに表現（あるいは表象）されるものを分析しようとする研究手法は新しいものではない。このような表現分析の手法は、もともと、女子大学の家政学や被服学系において、衣服の機能的分析を補完する目的で「表現」という視点が導入されたことから、服飾研究の一つとして発想され始まったものである。それは過去の流行現象や外見の趣向の事例研究にとどまらず、より深い人間の理解という目的をかかげて、表現の研究へと深化した。しかし、専門性の維持という壁がそうさせるのだろうが、結論の多くは、特定の人物の服装観や、装うことの意味の探求という形に収斂させてしまうのが現状である。本書には、そのような壁を越境しようとする意図がうかがえる。抽出した服飾描写とその実証的分析に、女性の生き方を語らせるという明確な方向性が認められる。このような手法は、服飾描写の抽出と収集、その読み込みの

蓄積、そして時代に対する確かな土地勘、それらすべてが揃ってはじめて可能である。ジェンダー研究に関わりながら、服飾史に出自を持つと自認する評者にとって、本書のような手法には共感するところが多い。著者の指摘は時に鋭く響く。言説として残された彼女たちの姿に、生き生きとしたイメージを付加してくれる。平塚らいてうと林芙美子が語られるとき、二人が生まれ育った頃の服飾事情が、具体的な描写として対比的に提示される。その結果、彼女たちがそれぞれに導き出した思考の必然性が見えてくるのである。

本書は下記のような章立てになっている。

- | | |
|-----------|-----------|
| I 梅子の和装 | IV らいてうの袴 |
| ——鹿鳴館 | ——煤煙 |
| ——浮雲 | ——青鞥 |
| II 一葉のふる衣 | V 芙美子の肩掛け |
| ——袖時雨 | ——放浪記 |
| ——裏紫 | ——細雪 |
| III 晶子の恋心 | |
| ——みだれ髪 | |
| ——或る女 | |

五人の女性たちにとって、執着した衣、「装うこと」の意識、評判となった扮装、思い出の衣服を展開の拠点として、話題は連関して広がっていく。たとえば、アメリカ帰りの梅子は和装がうまく着こなせないにもかかわらず、好んで和服を着用しようとしたこと。また、萩の舎の歌会にふる衣一重に身をつつんでのぞむしかなかった一葉が、六十余人の出席者のなかで最高点を採ったこと。らいてうは学生どころ袴にしても人と同じものをはこうとはせずに、自分なりに改良して着るというこだわりを見せていたこと。白い肩掛けの女学生に混じって、一人だけ黒い肩掛けで修学旅行の記念写真に写っている芙美子のことなど、それぞれの事例は一つの逸話という形式をとらずに、彼女たちの「生きること」の構成要素としてはめ込まれて語られていく。

著者はナビゲーター的立場で引用を繋いでいく。章立てに従って読み進めていけば、明治、大正、そして昭和初期にかけての女性たちの生きた現実の生活を、時系列で追うことにもなる。キーワードの見出しとして記されている作品は、彼女と活動時期が重なるとか、または深い関わりをもった男性作家のものである。同時期に対極の世界を生きた男性たちの視点による「装うこと」が配置される。引用された文献、作家の数は多い。漱石の作品からも、「らいてう」がそのモデルとされる女性の姿が、「らいてう」を語るものとして織り込まれていく。

ところで、本書のように、装うことの意識やその行為の分析から、女性の生き方を明らかにしようとする研究を、女性史家やジェンダー研究者はどのように評価するのであろうか。近代という時代に、言葉による表現において、卓越した主体性を示して生きた女性たちは、同時に、自らの「装うこと」にこだわって生きた女性たちでもあったというのが、本書が実証したところであるが、言ってみれば、これらは服飾描写を集中的に分析したところに導かれたものである。その点を批判の根拠にして、彼女らの偏った一面を導き出しているにすぎないと評されれば、実は、それに反証する術は今のところ見つから

ない。

女性たちの「生きること」を分析するのに「装うこと」というツールを選んだ段階で、答えの方向性は決まってくるからである。しかし、このような批判を生む背景に、女性研究が「装うこと」と素直に向きあえなかった過去の歴史が尾を曳いていることも確かである。

1970、80年代の女性解放運動を盛り立ててきた者が、「人間らしさ」や「女性の主体性」を回復する過程において、極力回避すべきことは「女性らしさ」という範疇で見られることであった。「女性らしさ」に属するものはすべて、その存在さえも認めようとはしなかった。「装う」という外見にこだわる意識や行為は、「女性らしさ」に属するに最たるものとして、従来、認識されてきただけに、無視すべき事柄の筆頭となった。女性科学者が、男性の科学者と同等に一人前の科学者として認知されようとして、意識的にファッションへの無関心・無頓着を装わなければならなかったという話にしたところで、理屈は同じである。

言うまでもないことだが、装うことや裁縫は近代以前の女性たちの場合、今以上に現実の生に深く関わってきた。衣料事情が異なり、そこに費やされた女性たちのエネルギーは大きい。それゆえに「装うこと」やそれに深く関わる裁縫という行為は、女性役割の象徴として、無視される運命をたどったわけである。裁縫教育を出発点とした家政学や生活科学系の領域で行われてきた「装うこと」の研究も、これらと同様に扱われ、ジェンダー枠を強化するものとして無視される領域に閉じ込められてしまったことは、文化的資源としては勿体無いことではあったが、このような文脈においては致し方ないことであったのかもしれない。本書タイトルの「装うこと生きること」に新世代到来を感じるとしたら、未だに我々は伝統的ジェンダー枠を払拭しきれない段階に止まっているということになる。

今、高校の家庭科の男女共修も10年目を迎え、女子だけが家庭科の時間に裁縫を実習することもなくなった。最近の風俗は、外見上の美的追求が女性特有のものでないことを実践として示している。「ジェンダー論」という研究領域には、外見や装いに関わる事象が課題として並ぶようになってきている。これらの研究が、身体やセクシュアリティの問題を考えるのに重要だと認識されているからである。たとえば、トランスジェンダーを分析する際に、異性装に関する詳細な考察は切り離せない。生きることへの活動エネルギーは生活のさまざまな事柄との関わりの中に生まれる。『装うこと生きること』というタイトルとその検証内容は、それらをすべて素直に認めていくべきだということを教訓として示している。

ジェンダー研究センターでは、1920年代から30年代にかけて世界的に同時発生したモダンガール現象を、アジアの植民地的近代を解き明かす高性能の分析ツールとしてとらえて、その諸相を考察の対象とする研究プロジェクトが進行している。そして、ジェンダー／セクシュアリティの視点からのモダンガールの検証も面白い結果を引き出そうとしている。「新しい女の表現しようとした自我は社会と対立的な自分勝手な小さな自我でしたけれど、モダンガールの表現しようとしている自我は社会を包み、また社会に包まれた自我なのです」というのは本書が引用する平塚らいてうの言葉であるが、モダンガールと呼ばれた女性たちの多くが時に軽佻浮薄と評された女性たちでもあった。外見にこだわって、顔も頭も最新流行に装って生きようとした女性たちである。その彼女たちが、ジェンダー研究の範疇として認識されている。

そのような観点からも、今、『ジェンダー研究』の書評の一冊として、本書『装うこと生きること——女性たちの日本近代』が取り上げられたことの意義は大きいと考える。

羽生清の略歴（本書より引用）

1944年生 京都工芸繊維大学大学院修士課程修了

現在 京都造形芸術大学教授

著書 『チェコスロヴァキアの民族衣装』（共著、源流社）、『デザイナーとしての W・モリス』（R・ワトキンソン著、共訳、岩崎美術社）、『デザインと文化そして物語』『装飾とデザイン』（昭和堂）。

（おやま・なおこ／お茶の水女子大学 COE 客員研究員）